

## ♪おけさ♪列車 砂漠に行く

国際テロ事件が起きる度に30年以上も前に試みた、破天荒な鉄道の旅が懐かしく思い出されてくる。あれは第3次中東戦争（1967年6月）直後の、戒厳令下におけるスエズ運河へのひとり旅だった。

カイロ駅でローカル列車に乗り込むや、キスリングを背負ったわたしの場違いの風体を見て、先に乗り込んでいた土地っ子たちが、目を白黒させている。たちまち車内で目立つ存在になってしまった。

やがてディーゼル車はのろのろとカイロ市内を走り抜けて行った。見渡すかぎり砂と砂礫の砂漠地帯に入るとスピードを上げ、太陽を背に東方へ進んで行った。1時間ばかり経ったころ偉そうな車掌が車内検札にやって来た。かれは突然興奮したようにわたしに向かってなにやらめきだした。入国ビザを見せてもてんで要領を得ない。

「パーミッション、パーミッション……ガヤガヤ……ガヤガヤ……ムニャムニャ……」

言葉はまったく分らなかったが、全市に戒厳令が布かれ、軍の治安管理下のスエズ市では、エジプトの入国ビザの外に、どうやら特別滞在許可証のような書類が必要だ、と言っているらしい。「これはやばいかな」と一瞬思った。

しかし、「ふざけるな！それなら最初からカイロ駅でおれの書類を確認して、スエズ行きの切符なんか売らなきゃいいじゃねえか」何かやることがドジだ。幸い、列車はスエズまでノンストップだった。今さら、滞在許可証云々なんて言っても手遅れだ。まさか列車を停めて、砂漠の下真ん中へ放り出し、サソリの餌食になるような非情な真似はしねえだろう。そのうち車掌はうんざりしたのか、諦めたのか、旅券に記載されたわが個人情報を手帳に書きつけて、苦々しそうに、明日直ぐにカイロへ戻れと捨てゼリフを吐いて、ぷいと立ち去ってしまった。

しばらくの間、ふたりのやりとりをはらはらしながら見ていた地元の乗客は、ほっとしたようだ。車掌が車両から立ち去ると、大きな拍手と大歓声がどっと湧き上がった。それからスエズまでの道中はかれらと大いに話が弾んだ。へんてこな奴が陽気に騒いでいるとの噂でも聞いたのか、隣の車両からもエジプトの男どもがどやどややって来て、いつの間にか周囲は黒山の人だかりとなっていた。立

錐の余地もない車内では、賑やかなドンチャン騒ぎが始まった。わたしも手ぬぐいでねじり鉢巻をして、‘はとぼっぼ’から、‘春日節’‘三波節’までご披露してしまった。そのうえおだてられ、「おはこ」の【チャンチキおけさ】まで音入りで演出してしまった。

♪～知らぬ同士がァ～ 知らぬ同士がァ

小皿叩いて チャンチキお～けさァ～あ～あ～…………♪

コップ（登山用アルミ食器）を小太鼓代わりに、ボールペンをバチ代わりにして音頭をとった。

♪チャンカ、チャンカ～、チャンチャンチャン～…………♪

エジプト式合いの手も入り、まさに歌詞の通り「知らぬ同士」の東洋人とエジプト人の手拍子に拍手が重なり、すっかり車内は‘おけさムード’になってしまった。出るは出るは……食べ物はナン（インドやアラブ地方の主食品）に、乾燥イモのようなおつまみ、乾し豆、怪しげな地酒まで供された。ついにエジプト側からも酔っ払った、「のど自慢」のおじさんがしゃしゃり出てきた。やおらエジプト舟歌のような演歌を唸り出した。

♪アイヤ～ ウ～ン ピコピコピコ

ペペペッペ ウ～ン バヤ～ン バヤ～ン♪

出しゃばるだけあって、なかなかの美声と声量である。なんだかわからないがとにかく理屈抜きに楽しい。はだしのおっさんや、腹巻姿のいかつい、眼帯のあんちゃんまで出てきた。まるで動く宴会場である。楽しい宴会はいつ果てるともわからず続いていた。

カイロからスエズへ向う、右手の砂漠の遙かかなたに建ち並ぶノッポの石油管の群れから、真っ赤な炎がたなびき、その幻想的で神秘的な光景は、完膚なきまでに破壊され、放置されたエジプト軍戦車の残骸とともに、ひときわエモーショナルな残像を留めた。

夕暮れの中を到着した終点スエズ駅では、不覚にもバランスを崩しデッキから滑り落ちこちってしまった。尾てい骨を打ち、うめき声をあげながら、ぶざまな恰好で線路上にうずくまっていた。まもなく連絡を受けた数人のエジプト軍兵士がドカドカとやってきた。わたしは、「滞在許可証」のスタンプがない旅券を取り上げられた挙句、二人の武装兵士に両脇をぐいっと抱え込まれ、そのまま駅前ホテルの薄暗い一室へ押し込められ、扉の外からロックされてしまった。「万事休す」であ～る。続編はスリリングな「監禁・脱走事件」であるが、♪おけさ♪列車の旅、おあとがよろしいようで…………。

<（社）日本ペンクラブ会員 近藤節夫>